

国産パプリカ生産の現状と課題

—既存型産地と新規参入大型経営体—

筑波大学大学院 生命環境科学研究科 林 俊秀

3. 統計に見る生産の推移と既存型産地の現況

1. 背景と課題

1993年にオランダから初輸入されたパプリカは、2012年では首位の韓国にNZ等が加わり合計3.2万tが輸入されている。パプリカは、輸入品によって消費が作られ、国内生産も微増してはいるが、現在も販売量の9割を輸入品が占めている。

しかし近年、パプリカ生産への企業参入など、新たな生産の担い手が生まれている。本研究では、国内のパプリカ生産の現状と展望を明らかにする。

2. 調査方法

初めに農林水産省統計より、国内パプリカ産地の推移と現況を概観する。その上で、主要4産地と3大規模経営体について訪問調査し考察する。

国内パプリカ生産の統計は、隔年毎に実施される農林水産省：地域特産野菜の生産状況によってのみ知ることができる(表1)。作付面積は平成18年の56haから22年の63haへと13%の伸びに止まっている。収穫量は、平成18年2,323t、20年3,057tと増加したが、23年は作付面積が増加したにもかかわらず2,663tへ減少した。また、主産地の半数が調査年毎に入れ替わり、また、作付面積が同じでも収穫量に差がある産地もあり、生産が安定していないことが示唆される。

既存の農家により生産されている産地の代表として、山形県と群馬県の産地調査を行った。生産農家一戸当りの作付面積は、最少0.8aから最大30a、総じて5aから10a程度が多い。10a当たり出荷量は4t前後である(表2)。生産施設の大多数

表1 国産パプリカの県別作付面積と収穫量

	H18年(2006年)			H20年(2008年)			H22年(2010年)			t/10a 10a収量
	県名	作付面積	収穫量	県名	作付面積	収穫量	県名	作付面積	収穫量	
①	熊本	12	635	熊本	8	503	茨城	9	569	6.3
②	群馬	6	41	長野	6	309	広島	9	316	3.5
③	長野	6	198	茨城	6	422	宮城	8	404	5.1
④	広島	5	163	山形	6	231	山形	8	221	2.8
⑤	山形	4	210	広島	5	177	長野	6	199	3.3
⑥	宮城	3	55	沖縄	3	64	群馬	3	125	4.2
⑦	茨城	3	217	青森	3	128	青森	3	105	3.5
⑧	高知	3	241	群馬	3	103	島根	3	61	2.0
⑨	北海道	2	98	高知	3	215	熊本	2	123	6.2
⑩	島根	2	10	宮崎	2	158	福島	2	87	4.4
	全国計	56	2,323	全国計	61	3,057	全国計	63	2,663	4.2

出所：農林水産省 地域特産野菜の生産状況より

の大多数はパイプハウスで、一戸当りの販売金額は、1,000千円から2,000千円と小規模である。多くの産地は、水稲や高原野菜生産などを経営の柱とした農家により構成されパプリカ生産は従であり、担い手の高齢化が進んでいる。

表2 生産農家一戸当たりの栽培面積と10a出荷量

県名	産地名		H20	H21	H22	H23	H24	年
山形	A	面積	6.5	6.1	6.1	6.5	6.2	a
		出荷量	4.3	4.4	3.4	3.7		t/10a
群馬	B	面積					16.0	
		出荷量		4.9	5.3	4.0		

筆者調査より算出

4. 参入大型経営体の現況と課題

1) 栽培規模と単収

平成17年頃よりパプリカを生産する大型温室が建設され他産業や新規就農者(社)が参入している(表3)。いずれも施設面積が1haを超える大型温室を有し、中にはC社のような4ha規模もある。栽培設備は、加温設備や養液栽培装置はもちろん、二酸化炭素施用や複合環境制御装置などを備えた重装備型である。10a当りの収量は13~18tで、さらにF社などは、冷房装置も含めた半閉鎖型の温室を駆使し28tを得ている。

2) 栽培技術および技術者の獲得

各経営体とも人材獲得に努め、さらに先進国での研修や種苗会社や資材会社などから有償・無償の技術導入やコンサルティングを受けている。

3) 負担となるイニシャルコストと燃料費

これらが導入した重装備型の温室建設コストは、平均3.42億円/haとなり、経営費に占める割合が大きい。このような温室の(定額法による)減価償却費は、年間3百万円/10aを超える(建設した温室の構造や付帯設備の割合によっても変化する)。

また、パプリカは栽培に夜温16~18℃を要求するため、A重油で換算すると年間10~15kℓ/10aを必要としている(温室や暖房設備の能力、あるいは加温方法・地域環境により変化する)。

表3 国内におけるパプリカを生産する大型温室

県名	名称	ha	t/10a	H	億円
県名	名称	温室面積	単収	建設年	建設事業費
宮城	C	0.7	16		
	C'	4.0	16	21	24.00
	D	0.7	15	21	2.27
	E	1.2	18	17?	
大分	E'	0.7	18	22?	6.00
	E'	0.9	18	23?	
長野	F	0.1	15	10	
	F'	0.3	28	18	0.70
茨城	T	0.8	13	S63	中古
	T'	1.5	15	19	2.70
	計	10.9			
宮城	C'	1.7		25	建設中
茨城	E'	2.0		25	建設中
	計	3.7			
	合計	14.6			
名称のコロンは、同一会社で複数の農場があることを示す。					
出展：筆者調査による					

5. まとめ

既存型の産地でのパプリカ生産は、簡易なパイプハウスを用い、家族労力に支えられたローコスト生産であるが、収穫量が低く、無加温であるため出荷期間も夏秋の一部に限られる産地が多い。また、栽培様式も土耕が大多数であり、土壌病害に弱いパプリカには不利である。簡易ハウスによる小規模経営が拡大する条件は厳しいと思われる。

他方、重装備型の大型温室経営は、多額の資本と高い栽培技術によって高収量を得ることが可能であるが、運営には高いレベルの温室オペレーションが必要とされ、その技量をもつ人材の確保や育成がされている。出荷期間も加温を行い冬春期も含む長期作型や、複数の作型や生産拠点を組み合わせる周年出荷を行う経営体もある。

建設および設備コストの低減や、エネルギー削減など課題もあるが、国産パプリカ生産において大型経営体から産出される割合は今後とも拡大すると思われる。大型経営体の温室面積合計×単収で算出すると1,789tとなり、平成22年の国産収穫量に比べて67%を占め、現在、建設中の温室の生産量が増えると2,000tを超えることになる。